Ⅲ．「山国（やまくに）」地名の由来　（市町村合併記念「山国町誌」（平成１７年２月）より抜粋）

「山国」の地名が初めて文献等の記録に登場したのは和銅６年（７１３年）の「豊前風土記」です。「高瀬川（現在の山国川）は、下毛郡の奥なる山国より流れ出で、その源は彦山の東より出る大川なり。此川に沿いて登れば山国谷に至る。この谷深くして村里多し、道路険しく大なる岩など、あまたありて風景宜しき処なり。」と記されている。

また「太宰管内志」（江戸後期の福岡藩の国学者伊藤常足が文化元年（１８０４年）から４０年をかけ天保１２年（１８４１年）に九州の地誌を８２冊に編纂したもの）によれば「山国郷山国は『也萬久爾』なり。名は四方山に立ち繞（めぐ）れる境地を言う。山国は中津の城下より豊後日田に通じる道筋なれば人の往来絶えず。」とされ、往還として拓かれた土地であった。ここから、山国は交通の要衝であり、行き来する人たちで栄えた土地であったことが知られます。

また、山岳仏教の修験霊場で隆盛を極めた英彦山の入山口にあたり、英彦山にまつわる民話や関連遺跡が残っています。山国は、彦山の荘園の時代を経て併合分離により名称を変えながら、江戸時代には、天領日田代官直轄地ならびに中津藩及び森藩に分割され１０の村からなっていましたが、明治２２年町村制施行によって三郷（みさと）村、溝部（みぞべ）村、槻木（つきのき）村の３村に統合されました。

その後、昭和２６年４月の３村合併により山国村が誕生、昭和３３年４月に町制を施行し山国町となりました。その当時は、人口８，５００人を擁していました。

平成１７年３月に中津市に三光村、本耶馬溪町、耶馬溪町とともに編入合併し、旧来の山国町の地域は「中津市山国町」として現在に至っています。